

Context 概念再考： 論理主義の Before&After

オーガナイザー

岡本 賢吾 (Kengo Okamoto)

東京都立大学

提題者

角田 健太郎 (Kentaro Tsunoda) 東京都立大学

三上 温湯 (Onyu Mikami) 東京都立大学・学術振興会特別研究員(DC)

岡本 賢吾 (Kengo Okamoto) 東京都立大学

現代論理学のほぼ一世紀半に亙る展開を振り返るとき、自ずと気づかれる一つの点は、幾度となく革新的な諸結果が確立されつつ、そのつど、それまで支配的だった論理哲学上の何らかの考えが大きく覆される(単なるドグマにすぎなかったことが暴き出される)ということである。そうした”哲学的な転覆”が半ば常態化していると言えるような状況の中で、何か恒常性のある、信頼できる論理哲学上の洞察といったものを求めようとするなら、一体どうすればよいのだろうか。

おそらく一つの方法は、革新的と言える当該の論理学の成果が、一方で何らかの通説を覆しながら、他方では、それまで過小評価されていたり、よく理解されないまま放置されていたどのような考えを vindicate したのか(そこまで言えないとしても、新たな再評価の方途を切り開いたのか)を検討することだと思われる。逆にまた、近年ますます精緻化する論理哲学史研究においては、すでに一定の”伝統”として確立された所説(その後の展開に対して強い影響力を持つ源泉となっている考え)について、確かに当該の著者や同時代人が何をどう語ったかの分析は子細に行われるものの、当の所説が現代的観点から見てどのような位置を占め、意義を保っているのか(確かに「覆された」のか、逆に「裏付けられた」のか、あるいは両面を含むのか)は、往々にして不問に付されがちである。そうした研究上の閉塞から脱却しようとするならば、上で述べたやり方のいわば”双対”、つまり、革新を重ねる現代論理学の諸成果によって当該の史的・伝統的な所説がどのような新たなサポートを受け取っているのかを明らかにすることが必要となるはずだと思われる。

以上のような関心にに基づき、本ワークショップでは、Frege と Wittgenstein という、現代論理の発端に位置づく 2 人の哲学的・技術的所説を焦点に据えながら、
(1) 2 人の考え(特に Context 概念)が、現代論理の最近の成果(具体的には、タイプ理論、とりわけ古典論理の計算論的意味論)に照らしてどう評価できるか、
(2) また、2 人に先立つ最も主要な論理哲学上の典拠である Kant の所説(特に、論理形式・図式・像についての考え) との間でどのような相互解明的な関係を形作っているか、
を検討する。具体的には、岡本が導入を行った後、(1)を角田が、(2)を三上が論じ、改めて岡本が総括を行った上で、フロアとの間で詳しい討議を行う。